

# インドネシアにおける高齢者の組織化

## —東ジャワ州の事例から—

伊藤 眞

### I はじめに

インドネシアでは高齢化が社会的問題として意識され始めている。インドネシアにおける高齢化対策の制度的な側面については、すでに伊藤【2014】でその概要を述べた。本報告では、前稿では十分に扱えなかった点、すなわち高齢者の組織化について東ジャワを例にとりあげる。なぜ東ジャワを例にとるかという点、同州がインドネシア諸州のなかでジョグジャカルタ特別州、中ジャワ州に次いで高齢化率が高いことに加えて、他州ではまだあまり見られない高齢者の組織化に関する試みがなされているからである。インドネシアの他地域における高齢者の組織化に関する情報はきわめて少ないのでにわかには断定はしたが、筆者の知る限りでは、東ジャワにおける取り組みはインドネシアにおいて先進的な意味をもつと考えられる。また、こうした取り組みについてはこれまでのところ報告がないのでまずは本報告において資料として提示する次第である。

### II 東ジャワ州概況

ここではまず東ジャワ州について、その特徴を見ておくことにしよう。同州はジャワ島の東部およびマドゥラ島よりなり、人口およそ 3750 万人(2010 年)、9 市 29 県から構成される。またインドネシア諸州の中で 38 という最多数の市県からなる州でもある。州都はインドネシア第 2 の都市スラバヤであり、東インドネシア地域の物資の集散地ジュアンダ港を擁する。東ジャワ州はおおよそ三つに地域に分類される。スラバヤ南西部、中央から中部ジャワ州に至る地域には、肥沃な土壌を基盤とする農業地帯である。かつてクディリ、シンゴサリ、マジヤパヒトなど強力な諸王国が興亡を繰り返した地域であり、とくにその版図をジャワ島から東部インドネシアにまで広げた仏教王国マジヤパヒトはよく知られる。主な産業は農業であり、スラバヤ南東部は、サトウキビ、カカオ栽培、高原地帯ではコーヒー栽培が盛んである。スラバヤ東部に位置するマドゥラ島は乾燥地域であり、塩田地帯を有するが農耕に適さない。なお、民族的にはジャワ人が 79%、マドゥラ人が 18% を占め、州人口の 96% がイスラーム教徒である。

#### 1 東ジャワにおける人の移動

BNP2TKI (Badan Nasional Penempatan dan Perlindungan Tenaga Kerja Indonesia

= 「インドネシア移民労働者送出し保護局」の略号。) によれば 2013 年 1 月～10 月末まで海外で働く TKI(移民労働者)<sup>2)</sup>の送り出し総数は 512,168 人であり、前年度の 494,609 人よりも若干増加している。512,168 人のうち、276,998 人(54.1% 小数点第 2 位以下四捨五入)が女性であり、その大部分が家事労働者である。上位 15 までの市県は下記の通りである。

1. 東ロンボック (西ヌサテンガラ州) 2. インドラマユ (西ジャワ州)、3. チレボン (西ジャワ州)、4. チラチャップ (中ジャワ州)、5. 中ロンボック、6. チアンジュール (西ジャワ州)、7. カラワン (西ジャワ州)、8. ケンダル (中ジャワ州)、9. スパン (西ジャワ州)、10. スカプミ (西ジャワ州)、11. ポノゴロ (東ジャワ州)、12. マラン (東ジャワ州)、13. プリタール (東ジャワ州)、14. プレベス (中ジャワ州)、15. 北ジャカルタ (ジャカルタ特別区) である。順位は年ごとに変動があるが、州別では、西ジャワ州、中ジャワ州、東ジャワ州、西ヌサンガラ州が毎年上位を占めている。ジャワ諸州に比して、東/西ヌサテンガラ州の移民は男性の割合が高いのが特徴的である。

東ジャワ州において比較的多くの移民を送り出しているのは、州の南部、とくにインド洋に面した地域であるといわれる。実際、上記の数字が示すように、西ジャワ州、中ジャワ州のいくつかの諸県には及ばないものの、ポノゴロ県、マラン県、プリタール県の 3 県はいずれも州南部に位置している。なお、海外移民の行く先は、女性の場合、マレーシア、中東諸国、シンガポール、台湾、香港である。

次表は、東ジャワ州において多くの移民労働者を送り出す上位 7 県(2 年間で 7000 人以上)の男女別数値と東ジャワ州の移民労働者全体の割合である。

【表 1】東ジャワ州移民労働者海外送り出し数 2012-2013 年

県	2012				2013			
	男性	女性	合計	%	男性	女性	合計	%
Ponorogo	1194	6088	7282	10.71	876	4275	5151	9.80
Tulungagung	1518	3472	4990	7.34	809	2484	3293	6.26
Blitar	1091	6434	7525	11.07	872	4307	5179	9.85
Kediri	847	3253	4100	6.03	731	2316	3047	5.80
Malang	997	7613	8610	12.66	917	4906	5823	11.08
Banyuwangi	1141	4572	5713	8.40	883	3010	3893	7.41
Madiun	825	3446	4271	6.28	706	2871	3577	6.80
Jawa Timur	17184	50819	69003	100.04	14958	37613	52571	99.98

(出処: [http://www.infokerja-jatim.com/index.php/baca/penempatan\\_tkis](http://www.infokerja-jatim.com/index.php/baca/penempatan_tkis) 2014 年 11 月 6 日閲覧)

ポノゴロ県、マラン県、プリタール県の 3 県が多くの移民労働者を送り出していること

は先に示したインドネシア上位 15 の市県でも含まれるので不思議はない。むしろ注目すべきことは、上の表からわかるように、いずれの県も女性移民労働者数が男性労働者数のほぼ 4 倍またはそれ以上の数を示していることである<sup>3)</sup>。数多くの女性労働者を排出している地域では、女性住民の比率が男性住民を下回るどころがある。先の 3 県について 2012 年の統計数値をみるならば、ポノゴロ県が 1.06、マラン県が 1.03、ブリタール県が 1.06 と男性住民が女性住民よりも数値が高くなっている。しかも、ポノゴロ県の 21 郡とブリタール県の 22 郡では、すべての郡において女性人口が男性人口を下回り、またマラン県では 33 郡中 32 の郡で女性人口が男性人口を下回っている。この男女性比の不均衡の要因を女性住民の海外流出の結果のみに帰することはできないかもしれないが、海外流出が諸要因のひとつであることは確かである。しかも労働力として移動する女性が 10 代後半から 30 代前半であること、男女の移民労働者の 6 割が既婚者であること<sup>4)</sup>などを考慮すると、とくに女性住民の流出が世帯形態に及ぼす影響の大きさを容易に推測できよう。村落部にとどまるならば育児、老親ないし祖父母の介護を担うべき若い世代の女性が海外へと流出し、そこで家事・介護労働に従事する。まさに「再生産労働の商品化」という状況の中でインドネシアの高齢化は進行していると考えられる。

## 2 東ジャワ州における高齢化

インドネシア中央統計局による高齢者州別統計については伊藤【2014】でも提示した。2009 年の高齢化率について言えば、ジョグジャカルタ特別州、中ジャワ州、東ジャワ州、バリ州、南スラウェシ州の順であり、これに 2012 年のデータを加えると次のようである。2009 年と比べて 2012 年データでは、一様に数値が下がっているが<sup>5)</sup>、各州の順位については大きな変動はない。

【表 2】 高齢者率 2009 年および 2012 年

州	2009 年高齢化率	2012 年高齢化率
ジョグジャカルタ	14.02	13.04
中部ジャワ	10.99	10.34
東ジャワ	10.92	10.40
バリ	10.79	9.78
南スラウェシ	9.03	8.34
北スラウェシ	8.91	8.45
西スマトラ	8.86	8.09
西ヌサテンガラ	8.69	7.23
ランブン	8.29	7.21
東ヌサテンガラ	8.01	7.44

Susenas 2009 及び『インドネシア保健省統計』2013 より作成

「アビヨソ老年学協会」(後述)が2006年にまとめた『東ジャワ州の高齢者』によれば、東ジャワ州の高齢化率は、1990年に7.99%、2003年に9.95%、2005年に10.34%に達しており、2005年の県別ではマゲタン県17.77%が最も高く、つぎにパチタン県15.47%、ポノロゴ県15.44%、プリタール県14.16%、マディウン県13.10%、ンガウィ県12.72%、マラン県12.35%の順となっている。2005年時点での東ジャワ州では、1ヶ村<sup>6)</sup>の平均人口は5860人であったから、その1割程度がすでに高齢者であるという状態に達していたことになる。こうして高齢者が増加する一方で若年人口が流出していく状況に対して、州政府は手をこまねいていたわけではなかった。それが、つぎに述べる高齢者対策を先導することになる「アビヨソ老年学協会」と「カラン・ウェルダ」設立に向けての動きである。

### III 東ジャワ州における高齢者への対応

インドネシアにおいて高齢者対策が始まるのは、1998年13号「高齢者福祉法」<sup>7)</sup>の施行以降である。スカルノ時代、1965年第4号「高齢者のための生活支援法」が制定されていた。この法律の主たる対象は介護を要する高齢者であり、その時期一部の州では国立の老人ホームが設立されたが、その法律の対象には高齢者一般は含まれなかった。しかも、その後のおおきな政治変動の中で、その法律の実効的意味はほとんど失われた。インドネシアがあらたな展望の中で高齢者を捉え直し始めるには、30有余年を待たなければならなかったのである。

#### 1 東ジャワ州における「アビヨソ老年学協会」(Yayasan Gerontologi Abiyoso)の設立

東ジャワ州における高齢者関連の組織・団体をながめた場合、まず注目されるのが「アビヨソ老年学協会」と呼ばれる他州では見出されない民間組織である。「アビヨソ」とは、ジャワ人にとってはなじみ深い影絵芝居「マハーラバータ」の登場人物の一人にちなんだ名称である<sup>8)</sup>。この組織の興味深い点は、中央政府が「高齢者福祉法」を制定する1998年よりも早い1993年という時点で、高齢化問題について取り組み、都市・村落部を問わず、高齢者の組織化を先導する民間の機関として設立された点である。設立の経緯については、『東ジャワ州アビヨソ老年学協会設立16周年記念集』に述べられているのでそれにしたがって述べておこう。

「アビヨソ老年学協会」の設立には次のような経緯がある。1992年インドネシアの高齢化率は7.9%を越えた。しかも大半の高齢者は政府や民間会社から年金を受給せず保険もない、つまりは社会的保障をもたない存在である。こうした状況に対する危機感から、東ジャワ州では有識者が集まり、来たるべき高齢化について意見交換をおこなった。そしてそこで話し合いの中から、「アビヨソ老年学協会」を結成することが決められたのである。その集まりの中心になったのは、ムハマッド・ヌール(1918~2010)元東ジャワ州知事であった。彼は1918年、貴族の子弟としてマドゥラ島で生まれ、戦前のオランダ教育を受けた。

オランダ時代から行政職につき、インドネシア独立後は出身地であるサンパン県において知事、つづいて東ジャワ州副知事などを経て同州知事(1967-1976)になった。独立闘争には従軍したが、軍人出身ではなく民間出身の人物である。彼は、州知事時代には、スラバヤとマドゥラ島間に大橋を架橋する計画を立案し、また小さき民に配慮する政策を進めるなど国民の人気が高かった。州知事退任後は、フランス駐在インドネシア大使を務め、インドネシア観光の宣伝普及にも貢献した<sup>9)</sup>。

1993年の「アビヨソ老年学協会」の設置は、東ジャワ州知事からの全面的な支持を得た。その後、同協会事務所は、1994年には3県、95年には8市県、1996年には26市県、2002年には1市と支所数を増やしていった。そして、2002年には州内の38市県すべてに「アビヨソ老年学協会」事務所が設置されるまでになった。さらに、これにつづき、郡レベルにおいても「アビヨソ老年学協会」の支部(pembantu perwakilan)が設置され、2005年には東ジャワ州の全654郡中529郡、すなわち80.89%の郡において「アビヨソ老年学協会」支部が設置されるに至った。

それでは「アビヨソ老年学協会」は具体的にどのような役割を果たしたのだろうか。第一の目的は、市県の各村落部に、「カラン・ウェルダ」(Karang Werda 「老人の広場」の意味、以下では便宜上「高齢者クラブ」と訳す)と称される高齢者組織を結成していくことであった。1996年には、「カラン・ウェルダ結成の指針」(Pedoman Pembentukan Karang Werda)が東ジャワ州知事令1996年65号として発令される。そして7年間を経た2003年10月には“Pedoman Pembentukan dan Pengembang Karang Werda”が作成される<sup>10)</sup>。「アビヨソ老年学協会」は、その法令に合わせて「カラン・ウェルダ結成のための指針書」を編集し、県と郡部にある「アビヨソ老年学協会」の支部に送り、以後各村落に徐々に「高齢者クラブ」が設立されていくことになる。

ただし、「高齢者クラブ」の組織化は、それほど順調に進行したわけではなかった。各市県で一様に進行したわけではないし、たとえ「高齢者クラブ」は設置されてもメンバーの補充率は次の記述があるように必ずしも芳しくなかった。

「高齢者のうちで高齢者クラブのメンバーになったのは、26.55%であり、残り73.45%はメンバーになっていない。」(前掲書：p.106)

「高齢者クラブ」の設置にあたっては、それ以前に村落部で活動が始まっていた「高齢者のための巡回健診」(posyandu lansia)のボランティア要員(kader)に協力をもとめる場合が多かったようだが、村落部の住民による「高齢者のための巡回健診」の受診率(20.13%)は、「保健センター」(Puskesmas)<sup>11)</sup>における受診率(63.31%)と比べてそれほど高くない。「高齢者のための巡回健診」への関心の低さが、そのまま「高齢者クラブ」への参加率の低さに反映されているとも考えられるだろう。

2003年には、村落部における「高齢者クラブ」の活動にインセンティブを与えることを目的とした「高齢者クラブ」のコンテストが始まり、2004年には第一回の最優秀賞としてシドアルジョ県の「ユディティラ高齢者クラブ」が表彰されている。このコンテストは2014

年現在まで継続しており、村落住民の「高齢者クラブ」への関心を高めるための手段となっている。以後、東ジャワ州内における「高齢者クラブ」の組織化率を見ると、2005年には8467村中4895単位(57.8%)、2008年には8497村中4965単位(58.5%)となっている。

【表3】は、設置状況を示すものである<sup>12)</sup>。

【表3】東ジャワ州県・市におけるアピヨソ協会代表支部及び高齢者クラブの設置数  
(2008年12月31日現在)

県・市名	アピヨソ老年学協会代表支部			高齢者クラブ		
	郡の数	設置済	未設置	村の数	設置済	未設置
Bangkalan	18	18	0	281	281	0
Banyawangi	24	21	3	217	217	0
Blitar	22	22	0	248	248	0
Bojonegoro	27	27	0	430	430	0
Bondowoso	23	14	6	209	195	14
Gresik	18	18	0	357	356	1
Jember	31	17	14	247	78	169
Jombang	21	10	11	306	72	234
Kediri	24	1	23	344	3	341
Lamongan	27	16	11	474	474	0
Madiun	15	15	0	206	101	105
Magetan	17	15	2	235	235	0
Malang	33	33	0	389	142	247
Mojokerto	18	18	0	304	86	218
Nganjuk	20	20	0	284	284	0
Ngawi	19	19	0	217	7	210
Pacitan	12	12	0	164	164	0
Pamekasan	13	0	13	189	26	163
Pasuruan	24	24	0	365	0	365
Ponorogo	20	20	0	303	50	253
Probolinggo	24	2	22	330	0	330
Sampang	14	14	0	186	186	0
Sidoarjo	18	18	0	353	353	0
Situbondo	17	17	0	136	11	125
Sumenep	27	19	8	332	96	236
Trenggalek	14	13	1	157	14	143

県・市名	アピヨソ老年学協会代表支部			高齢者クラブ		
	郡の数	設置済	未設置	村の数	設置済	未設置
Tuban	20	19	1	328	8	320
Tulungagung	19	15	4	271	271	0
Batu	3	3	0	23	0	23
Blitar	3	3	0	21	21	0
Kediri	3	0	3	46	46	0
Madiun	3	3	0	27	27	0
Malang	5	5	0	57	57	0
Mojokerto	2	2	0	18	18	0
Pasuruan	3	3	0	34	34	0
Probolinggp	3	3	0	29	29	0
Surabaya	31	31	0	163	139	24
Jawa Timur	656	529	127	8484	4965	3521

(出典：Dwi Windu Yayasan Gerotologi Abiyoso Provinsi Jawa Timur, p.199, を一部修正)

## 2 「アピヨソ老年学協会」の活動

「アピヨソ老年学協会」の主たる役割は、村落部における「高齢者クラブ」の結成を促すと同時に、「高齢者クラブ」のコンテストを主催することである<sup>13)</sup>。2004年に第一回の最優秀賞を表彰されたシドアルジョ県の「ユディスティラ高齢者クラブ」(後述)は、2005年にインドネシア社会省により、「高齢者サービス事業パイロット」に選定され、中央政府からも注目されるようになる。一方、中央では2004年52号大統領令により、「高齢者のための国家委員会」(通称 Komnas Lansia)が設置されたのに続いて、東ジャワ州では2007年に「高齢者のための州委員会」(Komda Lansia)が設置され、そのメンバーとして「アピヨソ老年学協会」のメンバー2名が加わるようになる。従来州社会省と連携関係にあった「アピヨソ老年学協会」は「高齢者のための州委員会」の一翼を担うことで権限をより強化したといえるだろう。2007年に同協会の提唱により、7月28日が「老人の日」として制定され、東ジャワ州政府により祝典が催されている。

ここで、地方にある「アピヨソ老年学協会」支部の活動としてプリアタル県の例を見よう。メンバーは11人から構成され、会長を務めるのは元教師であるジョコ氏(仮名)である。事務所は、同じく元教師のマジッド氏の自宅の一部をつかっている。事務所の壁には、つぎのような活動目標が掲げられている。

「健康で、人の役に立ち、かつ質の高い老い」とあり、その下に具体的な指針が書かれている。

- (1) 身体：バランスのとれた食事、飲み物は1日にグラス6～8杯で十分、十分な果物・

野菜。睡眠は6～7時間、適度の運動、年に1回の健康診断、健康のための技術的進歩に適應すること、病気になったらすぐに薬を飲むこと

- (2) 精神：思慮深くあれ、かつ積極的に行動せよ、生活と幸せを享受すること、ストレスを避けること、親しき交わり、信仰の道を歩め、つねに学び読書せよ、公的なこと、社会的なこと、健康に関すること、それらに注目し、耳を傾けよ。
- (3) 健全な環境：社会的交際、文化、宗教、生活環境。汚い水や空気、腐った食物を避けよ。

また、ブリタール県の「アピヨソ老年学協会」支部がおこなうべき県高齢者クラブ育成活動 (kegiatan pembinaan) としてつぎの6項目が掲げられている。(1) 組織の育成と連帯の強化、(2) 宗教への信仰心の育成、(3) 健全な心身の育成、(4) 芸術の育成、とくに伝統音楽、(5) 協同組合 (koperasi) の育成、(6) 工芸の育成、とくに箆などの編み物。

ジョコ氏によれば、最近とくに力をいれているのは、「仕事をもつ高齢者」の模範を住民に紹介することで、生産的かつ質の高い高齢者の手本を示すことだという。彼はその例として、「アピヨソ老年学協会」支部の有力メンバーでもあるハジ・サミン氏の例をあげた<sup>14)</sup>。

#### IV 「高齢者クラブ」の事例

つぎに「高齢者クラブ」形成について見ておこう。まず紹介するのは、比較的長い歴史をもつシドアルジョ県タマン郡の高齢者クラブ「デワタ」である。

##### 1 高齢者クラブ「デワタ」の事例

1996年の州知事令にもとづきシドアルジョ県知事は同年9月に発令した県知事令において各郡町に対して、それぞれの郡で「高齢者クラブ」を結成するように命じた。タマン郡では、1996年11月、ワゲ村を含む24ヶ村について「高齢者クラブ」の任命式が実施され、そこには県社会部、衛生部、「アピヨソ老年学協会」支部長、郡の有力者などおよそ200名が列席したという。その当時、現在の名称である「デワタ」の名はまだなかった。まず、「高齢者クラブ」の会長、副会長、書記、副書記、会計、それに健康、体操、福祉の各部会委員の計8名の役員が決められた。それから「高齢者クラブ」に対してさまざまな指導育成 (pembinaan) が始まった。当初は、体操と「ポシアンドゥ・ランシア」(高齢者向け巡回健診) 活動だけであった。2003年、村と郡の頭文字をとって「デワタ」(デサ・ワゲ・タマン) と改称した。郡や村役場からの指導育成があり、2008年には「高齢者クラブ」はより堅固な組織になった。村長が指導育成者となり、他に顧問もつき、部会も芸術、宗教、生活環境を加え従来の3から6部会になった。毎月最終の木曜日には、「高齢者向け巡回健診」とともに健康部会が開催された。体操部会は毎週おこなわれている。年に一度はリクリエーションとして遠隔の観光地を訪れる行事も加わった。2009年にはブリタール

県にあるブン・カルノ（故スカルノ大統領）の墓を参拝した。また 2011 年には、県レベルの高齢者クラブコンテストに郡を代表して参加した。。。」<sup>15)</sup>

この記述から、高齢者クラブがじょじょに組織として充実していった過程がわかる。1996 年の州知事令に対応して、いち早く高齢者クラブが村落部に設置にされたが、「高齢者クラブ」という名称はあっても前例のない社会組織であるがゆえに何をどうしたらよいのか村落住民にはなかなか理解しがたいものであったであろう。そうした状況では、従来から行われていた「巡回健診」活動に参加することがもっとも手っ取り早い活動形態であったであろうと推測される。今日のような活動が定着するのは、2008 年前後のことであり、結成からようやく十数年を経てそれまでに存在しなかった組織が村落住民の生活の中に定着するようになったのである。

## 2 プリタール県のポポ村の高齢者クラブ「プラソジョ」の事例

ポポ村は男性人口 3115 人、女性人口 3075 人、合計 6190 人の住民からなる。そのうち 60 歳以上の高齢者は 853 人である。女性人口に対する男性人口の性比率は 101.3 であり、また高齢化率は 13.78%である。

高齢者クラブ「プラソジョ」は 2010 年に結成された。メンバーは 56 歳以上としている。また、50 歳以上の者はボランティア要員（カデール）という位置づけである。

同クラブが結成されたきっかけは村長と村の有力者との話し合いから始まったという。「プラソジョ」という名称の由来は、11 の原則から 7 つの語を選び、その語の一部を合わせた造語であるという。その原則は、質素(kesederhanaan)を重視することであり、食べ過ぎないこと、考えすぎないこと、高慢な行動をしないこと、華美な服装をしないこと、そして次世代の手本になるようにふるまうことが強調される。

組織としては、高齢者クラブ「プラソジョ」の運営にあたり、13 人の役職者がいる。そのうち 11 人は村の年長者であり、他の 2 人は助産婦及び巡回健診のボランティア要員である。高齢者クラブは高齢者全員が参加の建前であるが、実際には積極的な者とそうでない者がいる。連携機関としては、保健センター、体操部、アビヨソ老年学協会県支部、県の衛生部主導の BKL（高齢者家族指導育成）運動などがあり、一方、村議会(LKMD)、ポシアンドゥ（巡回健診）や芸術グループとは協力関係になる。

同クラブ会長は、村落部の高齢者が抱える問題としてつぎの諸点を指摘した。(1)村落部の高齢者の多くは経済的に貧しい。(2) 高齢者は一般に体力が落ちているので病気にかかりやすい。そのため、「巡回健診」を毎月 1 回開催するとともに、毎週月曜日朝には集まって体操をおこなうことにしている。(3)教育レベルが一般に低く、大半が小学校卒業なしはそれと同レベルである。(4)高齢者の多くは、伝統的な農業労働者または農民であり、農業機械など近代的な設備を受け入れられない状況にある。(5)家内工業の訓練を与えることが必要であるにもかかわらずその必要性が住民によって理解されていない。(6)村落部の高齢者の多くは、伝統的生産物を作ることを専門としており、新しい作物の栽培を試みるだけ

の資本もない。

この(6)で指摘されているような伝統的生産物として竹による籠細工がある。先に見た「アビヨソ老年学協会」支部が注目している生産的な高齢者は、個人経営の事業家であるが、ポボ村ではむしろ村民どうしの共同作業を高齢者が中心となっておこなっている（写真1と2参照）。



（写真1 中央にいるのは元村長のハルジョノ氏。現在は趣味と実益を兼ねて籠工芸をおこない、若者にも教えている。両脇にいるのはブリタル県「アビヨソ老年学協会」支部のメンバー）



（写真2 こちらも竹の皮を利用して笊を作成。高齢の女性が竹皮を編み、力を要する枠作りは若い男性が担当している）

### 3 マラン県クドゥンサラム村高齢者クラブ「ハルジュナ・ムクティ」

クドゥンサラム村の人口は男性 6238 人、女性 5815 人、合計 12098 人、そのうち高齢者は 1498 人(12.38%)である。同村の位置する郡は 10 ヶ村からなり、各の村に 1 つの高齢者クラブがあるものの、そのうちで「活動をしている」のは 2 ヶ村の高齢者クラブだけであるという。その一つである「ハルジュナ・ムクティ」は、2000 年に発足したが 2008 年まではまったくの有名無実の活動状態であった。2009 年 1 月に復活したが、その母体になったのは、先行してあった「巡回健診」のボランティアであり、再結成当時はわずか 23 名であったという。ようやく 2009 年の 11 月になってから活動が活発化するようになった。2009 年から 2014 年の役員は、保護者として郡長、顧問として村長のほか、会長 2 名、書記 2 名、会計 2 名、それに健康、体操、娯楽、宗教、社会福祉、芸術の各部会 2 名、さらに渉外担当 4 名の計 22 名からなる。

毎月 1 回、クラブ役員による育成指導の検討会が開かれ、計画についての指導育成、活動の検討、評価とミニタリング、行政整理などが行われる。

高齢者クラブの設立趣意書には、冒頭に「同クラブの目的は、社会的な諸問題から個人が開放感を味わうような機会を与えること、そして高齢者は若い人とは一緒にやっつけていけないとか、年寄りはいつも面倒を起こすといった先入観を解消すべく努めることである」と書かれており、さらにその目的としてはつぎの 4 点が掲げられている。(1)住民の生活における役割として、スポーツ用具の提供、清潔で健康な生活を目指すように住民を活性化すること、お互いに配慮し合う活動を向上させること、(2)地域文化を守るための高齢者クラブの役割として、高齢者の芸術活動を補助すること、高齢者に伝統舞踊を練習する機会を提供すること、芸術活動を活性化すること、(3)社会福祉に関わる問題を封じ込めるための高齢者クラブの役割として、親のいない孤児をチェックし、高齢者の数をチェックすること、(4)社会福祉活動としての高齢者クラブの役割として、宗教的人物を助けること、住民の代表者を助けること、ボランティア要員を助けること、過去に当該の仕事を経験した人物を助けることなどである。

以上見たように高齢者クラブ「ハルジュナ・ムクティ」においては、高齢者を指導育成するというより、社会福祉的活動の主体としての側面がより強調されており、上記 2 例とはやや性格を異にしている。

### 4 シダルジョ県高齢者クラブ「ユディスティラ」

高齢者クラブの最後の事例として、「ユディスティラ」の活動表を紹介する。同高齢者クラブはスカールダガン村にある。同村の総人口は 7085 人(男性 3059 人、女性 3076 人)、世帯数は 2158 世帯(2014 年 10 月の村役場統計)である。なお、村の高齢化率を示すデータは入手できなかったが、シダルジョ県全体の高齢化率は 7.97%(2012 年)であり、東ジャワ州においてもっとも数値が低い。「ユディスティラ」は過去に県代表として表彰されたことで評価が高い。

【表 4】シダルジョ県「ユディスティラ」2014 年 12 月活動表

	曜日・時間	活動の種類	提供者	着用する 制服(上衣)	着用する 制服(下衣)
1	12/02 火 07:30-10:00	体操 合唱	アミ、ピン タティ、ラフ マ、ムジオノ	白	黒
2	12/05 金 7:30-9:30	体操・合唱	同上	白	黒
3	12/09 火 7:30-10:00	ジャワ歌謡 体操	スミラ夫人 アミ、ピン	ピンク	ピンク
4	12/12 金 7:30-9:30	体操 合唱	アミ、ピン タティ、ノノ	ピンク	ピンク
5	12/16 火 7:30-10:00	ポシアンドゥ 体操	ジョコ、スセ ノ、スヤティ アミ、ピン	青	青
6	12/19 金 7:30-9:30	講座 体操	保健所チーム アミ、ピン	青	青
7	12/23 火 7:30-10:00	体操 合唱	アミ、ピン タティ、ラフ マ、ムジオノ	緑	白
8	12/26 金 7:30-9:30	ウォーキング ／自転車 合唱	スギアルト、 イマム タティ、ノノ	緑	白
9	12/30 火 7:30-10:00	宗教講座（イ スラム教／キ リスト教） 体操	ハジ・アブド ウル、スギア ルト アミ、ピン	黄	黒

表 4 が示すように、活動は毎週月・火・金の午前中に行われる。活動には、体操、合唱、ウォーキング、ジャワ歌謡、健康講座、宗教講座、そして高齢者向け巡回健診などであり、各活動にはその責任者が決められている。さらに高齢者クラブメンバーは曜日ごとに色違いのユニフォームの着用が推奨される。またキリスト教徒のメンバーは、貧しい者に月一度弁当を支給する活動もおこなっている。一方、巡回健診活動には、村役場の係員 4 名と 16 人の専門ボランティア(カデル)が関わっているが、すべて女性であり、20 人中 17 人が「ハジヤ」(メッカ巡礼を果たした女性に対する称号)を有している。このことから、専門ボランティアになるのは、経済的には中間層出身以上の女性であると推測される。

## V 「指導育成」の対象として的高齢者

本稿では、東ジャワ州で始まった高齢者組織化の例を、「アピヨソ老年学協会」と「カラン・ウェルダ」代表と呼ばれる高齢者クラブに絞って報告した。冒頭に述べたように、これらの組織は、インドネシアにおいて先進的な試みであり、それ以前にはインドネシアにおいて存在しなかった制度、社会組織である。制度としてすでに定着した感のある東ジャワの状況を見る限りにおいて、そこに見出される組織上の特徴について気がついた点を指摘しておきたい。

まず、東ジャワにおいて、「アピヨソ老年学協会」と「カラン・ウェルダ」というふたつの組織がなぜ普及したか、あるいは普及しつつあるのかを考えてみたい。この点で人々が異口同音に指摘するのは、その提唱者が、東ジャワにおいてカリスマ的力をもつ人物ムハマッド・ヌールによって提唱されたことである。後に、ムハマッド・ヌールは「伝説的人物」と評されている。また「アピヨソ老年学協会」と言えば人々の口にするのは依然この人物の名前である。しかし、「アピヨソ老年学協会」普及の理由を彼だけに帰することはできない。実際は、1996年の州知事令施行から2003年頃までの歩みは遅々としている。「カラン・ウェルダ」の組織化も同様に、その期間はいわば空白期（高齢者クラブ「デワタ」の例）に近い。それが2000年代に入ってから進展したのは、地方分権化と民主化の進行という自由な流れの中で、これまでの官僚組織にとられない、半ば民間的な組織（しかもその構成員の大半は、ほとんど無給といってもよい退職者からなる）が受け入れられやすかった状況が一因していると考えられる。ただ、そうした新しい組織が、それまでのインドネシアにおいて未経験であったがゆえに、その浸透には時間を要したのである。

しかし、こうした組織にも改善の余地はある。筆者が違和感をもったのは、ブリタールの「アピヨソ老年学協会」支部でみた組織の活動目標の中に、'bina'という語が多用されていることであった。'bina'という語は「建設する」、「刷新する」という意味が辞書には第一義的意味として述べられている場合が多いが、人を対象とする場合に「育成」という語義が適切であろう。先の事例の一部を再びここでとりあげれば、(1) 組織の育成、連帯強化、(2) 宗教への信仰心の育成、(3) 健全な心身の育成、(4) 芸術の育成、とくに伝統音楽、(5) 協同組合(koperasi)の育成、(6) 工芸の育成、といった具合である。実はこの'bina'という語の動名詞である *pembinaan*' という語は法令においてもしばしば用いられる。「カラン・ウェルダ」の組織化の発端となった州知事令1996年65号においても、然りである。冒頭は次のようである。

Menimbang: a. bahwa dengan bertambahnya usia harapan hidup sebagai keberhasilan pembangunan di segala bidang, jumlah para lanjut usia makin bertambah sehingga perlu dilalukan pembinaan agar kehidupannya makin sejahtera dan berkualitas melalui kegiatan wadah Karang Werda;

(判断する：a. すべての領域における開発の成果として平均余命が増加するにおよんで高齢者は増加し、その結果カラン・ウェルダという団体活動を通じて生活をより豊かで質の高いものにするために育成することが必要である。)

東ジャワ州知事令を読むと、カラン・ウェルダの諸活動はまさにこの法令にそって進行していることがわかる。法令で述べられているのは、カラン・ウェルダと高齢者とは別の主体であり、前者は後者の生活を豊かにするために育成する(指導する)ということである。言い換えると、本法令で規定されているカラン・ウェルダとは、指導育成を通じて高齢者を向上させる組織であるということである。この点に関してつぎのような疑問が浮かぶであろう。カラン・ウェルダの組織とは、指導育成を通じて高齢者どうしが同じ立場にたつて助け合える場であるべきではないのか。そうでないとカラン・ウェルダの構成員の中に、向上させる者と向上させられる者という力関係が生じてしまい、結局、地域の有力者だけがカラン・ウェルダの役職を持ち回りし、他の者はその組織の中で、力関係を追認するしかない。もしそうであるならば、地域の高齢者があえてメンバーになる必要性はどこにあるのだろうか<sup>16)</sup>。

以上の指摘は、ひとつの語彙の使用頻度の高さから発した疑問である。実際、高齢者のための委員会のメンバーの一人は‘bina’という語にはスハルト時代の抑圧的な響きがあると語った。インドネシアにおいて「高齢者組織」が上からの垂直的な関係に依存する組織ではなく、多くのメンバーを動員し、相互扶助的な機能を発揮するようになるためには、考慮すべき点であるだろう。

## VI まとめ—なぜ高齢者の組織化に注目するのか

筆者は以前、高齢者のセイフティ・ネットワークの構築という観点から東アジアにおける高齢者組織について調査プロジェクトを組んだことがある<sup>17)</sup>。高齢者組織がセイフティ・ネットワークと結びつく理由は、それが仕事から離れ、健康の衰えの中で次第に社会的交流の幅を縮小させてゆかざるを得ない高齢者にとっては、何らかの組織のメンバーとなり、そこで一定の役割を与えられることが、ほかならずセイフティ・ネットワークになり得るという考えからであった。実際、老人の孤独死は、社会的紐帯の弱体化と高齢者単身世帯の増加が進む日本のような現代社会では、もはや珍しいことではなくなってしまった。しかも、老人の孤独死は、今や都市部のみならず村落部においても起きている。一人で暮らす病弱な高齢者がどのような生活をしているか、近隣の者でさえ関知しない状況になりつつあるのである<sup>18)</sup>。高齢者の組織化はそうした状況を打開するとは言わないまでも、いくらかは改善し得る可能性をもちうるという考えから、東アジアにおける高齢者組織の様態を比較することが先の調査プロジェクトの目的であった。

ところで日本では少子化と高齢化が結びついて進行するが、インドネシアの状況はいか

なるものであろうか。伊藤【2014】でも述べたように、国家主導による家族計画の実施は世帯規模の縮小化を招いたものの、少子化の速度は緩やかである。むしろ注目すべきなのは、インドネシアにおいて全国規模で起きている国内移動と国外移動であり、それが一部の地域にいわゆる過疎化問題をもたらしているのではないかと考えられる。残念ながら、「過疎化」を扱った調査研究は非常に少なく<sup>19)</sup>、「過疎化」自体は問題として取り組むべき政策的課題とはなっていない。しかし、詳細にインドネシア諸地域の人口構成を眺めるならば、男女性比の偏りや生産年齢層の流出などの結果、偏った人口構成を示す地域は予想外に多い。そして、そうした人口上の問題が、世帯規模の縮小化、平均余命の延長化などと結びつき、高齢化という状況をじよじよに露わにしつつあるのが、インドネシアの現況であると考えられる。

インドネシア政府による高齢化への取り組みは、国際的な動向と圧力の中で始まったかもしれないが、具体的な高齢化問題への取り組み方は各州によって必ずしも一様ではない。本報告では、高齢者組織の制度化にもつばら焦点を当てたが、次なる報告では、高齢化と過疎化の問題を、よりミクロな視点による調査からアプローチすることになろう。

## 参考文献

- BNP2TKI 2014 "Data Penempatan TKI Berdasarkan Provinsi dan Status Perkawinan periode 1 Januari S.D 31 Oktober 2014", BNP2TKI, Jakarta.
- 伊藤 眞 2014 「インドネシアにおける高齢化とその対応—予備的報告—」人文学報第 483 号、首都大学東京人文科学研究科。
- Karang Werda "Parasojo" 2014(mimeo.) *Profil Karang Werda "Parasojo"*, Sekretariat Karang Werda "Parasojo", Blitar.
- Karang Werda "Harjuna Mukti" (n.d.) *Profil Karang Werda "Harjuna Mukti"*, Desa Kedungsalam, Kecamatan Donomulyo, Kabupaten Malan.
- Kementerian Kesehatan RI 2014 *Buletin Jendela Data dan Informasi Kesehatan*, Jakarta.
- Komisi Daerah Lanjut Usia Provinsi Jawa Timur 2011 *Laporan Kajian tentang Pemberdayaan Lanjut Usia Melalui Dukungan Sosial*, Surabaya.
- Komisi Daerah Lanjut Usia Provinsi Jawa Timur 2011 *Himpunan Peraturan Perundang-undang Mengenai Kesejahteraan Lanjut Usia*, Surabaya,
- Komisi Daerah Lanjut Usia Provinsi Jawa Timur 2011 *Lanjut Usia Berguna dan Berkualitas*, Surabaya.
- Komisi Daerah Lanjut Usia Provinsi Jawa Timur 2012 *Hasil Monitoring dan Evaluasi Program Pelayanan bagi Lanjut Usia Provinsi Jawa Timur*, Surabaya.
- Komisi Daerah Lanjut Usia Provinsi Jawa Timur 2012 *Laporan Kajian Identifikasi Potensi dan Kesiapan Pra-lansia di Jawa Timur dalam Memasuki Masa Lanjut Usia*, Surabaya,
- Komisi Daerah Lanjut Usia Provinsi Jawa Timur 2013 *Profil Penduduk Lanjut Usia di Provinsi*

*Jawa Timur Tahun 2012, Surabaya.*

Yayasan Gerontologi Abiyoso 2006 *Lanjut Usia di Jawa Timur, Surabaya.*

Yayasan Gerontologi Abiyoso 2009 *Dwi Windu Yayasan Gerontologi Abiyoso Provinsi Jawa Timur, Surabaya.*

インターネット情報

[http://www.infokerja-jatim.com/index.php/baca/penempatan\\_tkis](http://www.infokerja-jatim.com/index.php/baca/penempatan_tkis)

## 注

- 1) 本調査を行うに当たっては、東京都高度研究「東南アジアにおける新興感染症」（研究代表者楊明首都大学東京教授）及び科学研究費「東南アジアにおけるケアの社会的基盤」（研究代表者速水洋子京都大学教授）の助成を得た。ここに記して感謝の意を表する。
- 2) TKI は直訳すると「インドネシア労働力」であるが、慣例にしたがい「インドネシア移民労働者」と訳す。
- 3) 東ジャワ州全体で男性労働者数が女性労働者数を上回るのはマドゥラ島の4県とグレシク、ラモガンというジャワ島北岸部の隣接する2県のみである。マドゥラ島は伝統的に男性移民を送り出すところであり、一方グレシクには海外資本の工業団地がある。
- 4) 2014年1月～10月末の統計によれば東ジャワからの移民労働者の婚姻の有無を見ると、66016人のうち41263人が既婚、18462人が未婚、6291人が離別である。BNP 2TKI 局の Data Penempatan TKI Berdasarkan Provinsi dan Status Perkawinan periode 1 Januari S.D 31 Oktober 2014 による。
- 5) この数値の減少についての理由は不明である。
- 6) この数値は、「村」(desa)と「村区」(kelurahan)を合計した数である。本報告では、「村」と「村区」を区別せずに「村」と呼ぶことにする。
- 7) 本法律についてはさしあたり伊藤【2014:4】を参照。
- 8) 叙事詩「マハーラパータ」の作者とも言われるヴィヤーサがジャワの影絵芝居ではアピヨソとして登場する。王位を降りてから聖なる修行者となる人物像を、あるべき高齢者と重ね合わせたアピヨソ老年学協会のS氏は筆者に説明した。
- 9) M.Noerについては、コンパス紙(スラバヤ版) *Kompas*, 17/04/2010 参照。
- 10) 1996年から2003間で7年もの期間を隔てている。この期間は、インドネシアにおいて、アジア通貨危機、地方各地における政治紛争、スハルト大統領退陣、民主化と地方分権化の進行と混乱といった政治的・経済的・社会的な激動期とまさしく重なっており、それゆえに政治的遅滞をもたらしたものと推測される。
- 11) Puskesmas(保健センター)は、各県の郡部に少なくとも一つは設置されており、地域医療の中心的存在になっている。日本の保健所とは異なり、病床施設を備えており、一般医、歯科医、看護師、助産師などから構成される。それらの看護師、助産師が村落部を巡回し、おもに乳幼児、妊婦の検診を行うのが「ポシアンドゥ」であり、本報告では「巡回健診」と訳す。また「ポシアンドゥ・ランシア」は、高齢者を対象として「巡回健診」をおこなうものである。乳幼児、妊婦を対象とした「ポシアンドゥ」はインドネシア各州で普及していると考えられるが、「ポシアンドゥ・ランシア」の普及は地方によってまちまちである。
- 12) ただし、全部の郡と村落でそれぞれアピヨソ協会支部と高齢者クラブが設置されていると「申告」

---

されても、後述するブリタル県の例のように必ずしも実態を反映しない場合もありうる。

- 13) また高齢者関連の調査報告、印刷物も編集している。
- 14) 元教師であるが現役時代から養鶏、鶏食品工場を経営、教員退職後はさらに事業を拡大している。
- 15) <http://werdadewata.blogspot.jp/p/kontak-kami.html> から引用、要約した。(2014年10月26日閲覧)
- 16) この指摘とは逆に、なんらかの上下関係、権威関係がないと組織自体が統合性をもちえない場合もあるかもしれない。あるいは、高齢者間の貧困、教育レベルなどにおいて圧倒的な格差が存在する現在の状況がそうした関係に該当するのだろうか。こそれについての考察は他の機会にゆずることにする。
- 17) 伊藤真編『東アジアにおける高齢者のセイフティネット構築に関する社会人類学的研究』、首都大学東京人文科学研究科。
- 18) 筆者がかつて沖縄県具志頭村で開いた、高齢者によるシルバー・ボランティア活動のきっかけは、村落部で暮らす老人の孤独死がきっかけであったという。
- 19) 例外的なものとしては、Rijanta, R. & Prakoso, B (1999) による過疎化についての地理学分野からの研究がある。